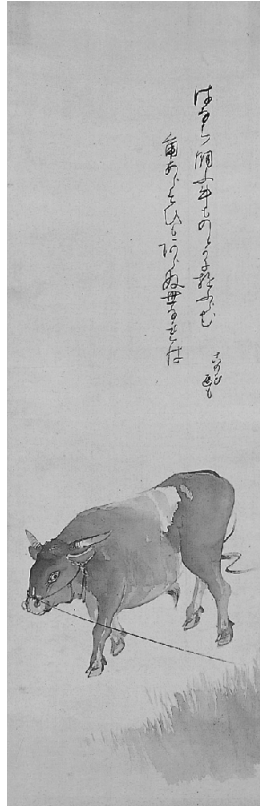


表紙作品解説



牛図自画賛 一幅 跡見花蹊筆

83.5×27.5cm

絹本墨画 跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

草むらの端に歩を進める一頭の牛が、この作品の主人公である。牛は堂々とした体躯を持ち、次の瞬間には、顔をぐいと反し、動きだすかと思われるほど生き生きと表現されている。

「牛図」には、同構図で二つの作品が存在する。もうひとつの「牛図」は、平成15年に跡見純弘理事長から寄贈されたもので、和歌を跡見花蹊が、画を石垣東山（1804-1876）が合作している。跡見花蹊は10代の頃に石垣東山に師事しており、最初期の作品と考えられる。一方、本作は絶妙な墨の濃淡で牛を描き、その筆致に円熟味が感じられることから、その後制作されたものであろう。

跡見花蹊は右上に、一はな（放）ち飼ふ牛ものどかに遊ぶらむ角あらそひもあらぬ世なれば一と書き添えている。初めに師と合作をした頃、時は幕末の動乱期にあった。次いで筆をとった時、世はまた不安な時代を迎えていたのだろうか。

引綱をつけられた牛は、大きな瞳でただ静かに私たちを見つめている。作者の心情が、この牛の姿に投影されている。

写真提供：跡見学園女子大学花蹊記念資料館
文：学芸員 渡辺 泉